

## ドイツ文学者 雪山俊夫の生涯と業績

上村 直己（熊本学園大学元非常勤講師）

### Leben und Leistung des Germanisten Toshio Yukiyama Naoki KAMIMURA

#### 1. 雪山文庫の思い出 — 序文に代えて

筆者の雪山文庫との出会いは九大の大学院時代にさかのぼる。西田越郎助教授による中高ドイツ語の演習に参加し、同時に西田先生が文学部紀要に発表したヴァルター・フォン・デル・フォーゲルヴァイデやハインリッヒ・フォン・モールンゲンなど中世ドイツの詩人たちに関する論文を読んで興味を抱くようになった。それで修論も中世文学から選ぶことに決めた。その頃出会ったのが独文科の図書室にあった雪山文庫である。同時に同文庫はドイツ文学者雪山俊夫の蔵書に由来するものであることを知った。その後同文庫を利用して修論 *Über die Entwicklung der Minneauffassung Walthers von der Vogelweide* を書き上げ提出した。そして博士課程に進んだが、半年後中退した。そして昭和40年10月から富山大学文理学部の専任講師（ドイツ語担当）となった。驚いたことにそこの独文科の図書室でまたもや雪山文庫に出会った。さらに私の歓迎会が雪山俊夫の生まれ故郷である富山県宇奈月町で開かれた。こうなると不思議な縁を感じざるを得なかった。

雪山の死（昭和21年）後その蔵書は九州大学、富山大学、神戸大学の三大学が購入した。それが今日雪山文庫として残っているのである。筆者が利用したのは前述のごとく九州大学と富山大学に所蔵されている資料であった。神戸大学所蔵の本については『雪山文庫目録』<sup>1)</sup>がある。それを見ると1861冊の洋書から成り、全ての書名を記し、索引が付いている。序文「雪山文庫について」（加藤一郎）においてその経緯が語られている。昭和23年神戸大学文理学部にドイツ文学講座が開設されることが確定し、その準備として加藤一郎教授（独文学）は相当数の専門図書揃えたいと考えていた矢先、京大時代の恩師故雪山俊夫博士の蔵書が処分されるのを聞いて、



雪山俊夫

(1)

京都で遺族に会った。だが購入資金を集めるのに苦労したが、学長の支援もあり最終的に貴重な蔵書を手に入れたことを喜んだ。筆者は現在、日本独学史を専門としているが、院生時代から約10年間はドイツ中世文学を研究していた。<sup>2)</sup> その際最も利用したのが雪山文庫であった。

雪山は中世文学を専門としたが、元来彼は視野の広い学者であった。マン兄弟をいち早く紹介したり、特に日本ゲーテ協会の設立に中心となって尽力するなど日本のドイツ文学研究上の功績も大きく、独学史的に注目すべき存在である。本稿の執筆を思い立った所以である。

## 2. 生い立ち及び幼少時代

雪山俊夫は明治13年(1880)4月8日、富山県下新川郡浦山村(現・宇奈月町)489番地に父の雪山順円、母むらの二男として生まれた。父は同村善巧寺ぜんぎょうの住職であった。同寺は浄土真宗本願寺派の寺である。筆者の手元に雪山俊夫自身の手になる詳細な履歴書がある。これは現在金沢大学資料館(同大学付属図書館内)に保管されているもので、彼が四高教師に就任する際(明治40年)に作成されたものだが、彼の几帳面な性格を物語っている。これには四高の事務員によってまとめられたと思われる雪山の四高時代の履歴書が添えられている。

さて、履歴書によると雪山俊夫は明治19年3月富山県下新川郡浦山村鶏鳴小学校初等科1年前期に入学した。同27年3月同県新川郡三日市町高等小学校卒業。同年9月富山県尋常中学に入学。同32年3月同中学校を卒業した。そしてこの間受けた各種の賞について次のように記している。

- 一、明治十九年五月富山県下新川郡浦山村鶏鳴小学校初等科一年中試業ニ際シ学力優等ニ付本朝三字経一部賞与セラル
  - 一、同二十一年九月平素精勤学力優等ノ旨ヲ以テ小学校生徒賞与規程ニ基キ一等賞ヲ授与セラル
  - 一、同年十二月富山県下小学生徒学業比較試業会ニ於テ学業拔群ニ付一等賞ヲ授与セラル
  - 一、同二十三年九月平素精勤学業拔群ニ付一等賞ヲ付与セラル
  - 一、同二十六年富山県下小学生徒学業競励会ニ於テ学業拔群ニ付一等賞ヲ授与セラル
  - 一、同二十八年三月富山県尋常中学校第一年級修了試験ニ於テ学力優等ニ付英文典及ヒ英和字典各一部賞与セラル
  - 一、同二十九年三月第二年級終了試験ニ於テ学力優等ニ付須因頓氏万国史一部賞与セラル
  - 一、同三十年三月第三年級修了試験ニ於テ学力優等ニ付植物学及ヒ動物学教科書各一部賞与セラル
  - 一、同三十一年同校ニ於テ初メテ特待生制度ヲ施設セラレ第五年級特待生ヲ命ゼラル
  - 一、同三十二年三月同校卒業ニ際シ品行方正学術優等ニ付唐宋八大家文集一部賞与セラル
- 右之通相違無之候也

明治三十九年十月十二日

右

雪山俊夫 印

これにより雪山少年は小中校生時代に成績優秀により度々表彰されたことが分かるが、同時にそのことを履歴書に詳細に書き記していることは彼の几帳面な性格を示している。なお、雪山は履歴書の冒頭に「東京市下谷区上野桜木町二十番地佐柄木栄吉方」「富山県下新川郡浦山村四百九十七番地平民僧眼弟」と記しているのので、この履歴書は金沢に赴任する前に東京で書かれたものであることが分かる。

### 3. 一高を経て東大独文科へ

さらに履歴書によれば明治32年(1899)7月第一高等学校第一部文科に入学した。

俳人の荻原井泉水とは一高の寮で同宿、以来親友となった。明治35年7月文科卒業。この時小山内薫、川田順、早川文哉、吉田豊吉らも一緒に卒業している。

明治35年(1902)9月東京帝国大学文学科大学独逸文学科入学。ここではカール・アドルフ・フローレンツ教授、及び藤代禎輔講師の薫陶を受ける。

独文科の一級上には高橋周而、早川文哉がおり、二級上には桜井政隆(天壇)、石倉小三郎、山岸光宣、橋本忠夫(青雨)など後年独文学界で活躍する錚々たる人がいた。

この間履歴書によると、雪山は明治36年11月より37年6月まで病気のため休学した。

明治38年6月文科大学語学試験に合格。同39年4月グリルパルツァーに関する卒業論文(ドイツ文)を提出。6月卒業試験、7月10日東京帝国大学文科大学独逸文学科を卒業した。この時一緒に独逸文学科を卒業した者に原弘毅、川下喜一(江村)、高島喜一、白川精一などがいた。

### 4. 四高教授を経て六高教授就任

履歴書によると、雪山は40年3月16日附けで金沢の第四高等学校の講師嘱託となった。(年手当金八百円給与)独語担当。そして翌41年4月14日付けで教授に任命された。(高等官七等、一〇級俸、従七位)。当時金沢市新堅町に住んだ。明治42年福井県坂田郡本荘村龍島みちえと結婚。同44年長男俊之誕生。

雪山は履歴書によると、明治44年(1911)9月1日付けで岡山の第六高等学校教授に就任した。(叙高等官六等、八級俸下賜)。岡山市門田屋敷181番地に住んだ。<sup>3)</sup>

同僚に同郷の俳諧史家志田素琴(義秀)がいて親交があった。岡山時代はドイツ文学者として活躍が盛んになる。

『第六高等学校一覽』(自大正元年至大正2年)を見るとドイツ語科のスタッフには、教授として足立謙吉、生田巖太郎、雪山俊夫、池山栄吉、天沼貴彦、講師に秋元喜久雄(廬風)、立沢剛、傭外国人教師にマックス・フェーラー(Max Fehler)、オットー・ベッケル(Otto Becker)らがいた。同一覧(自大正5年至大正6年)では教授として雪山俊夫、池山栄吉、天沼貴彦、立沢剛、講師に小野沢百八、藤森成吉、傭外国人教師にマックス・フェーラーらがいた。明治44年に六高に入学した舟木重信<sup>4)</sup>は「雪山先生を想ふ」<sup>5)</sup>において次のように当時は回想している。

私が岡山の第六高等学校に入ったのは明治四十四年であって、入学するとすぐ先生にドイツ語を教へていただいた。先生はその一、二年前に独語の主任教授として岡山に迎へら



れたといふことであった。当時六高には年長のドイツ語の有名な大家が多くゐられたのでまだ若い先生がそこにその主任教授として迎へられたことは非常に名誉なことであり、先生の人格学識が既に高く評価してされてゐたことを証明してゐる。(中略) ことに当時世界的に称賛されてゐた新浪漫派、「若きヴィーン文学」についての先生の批評紹介は私達文学青年を魅了したものである。三年生になった時、私は先生にお話してドイツ文学科に行くことにきめたのであるが、その頃ドイツ文学科に行くのは私一人であった。ところが先生はその私一人のために特に授業時間をつくって、私一人に向つてドイツ戯曲と文学史を教へてくださった。実にありがたいことで、それは生涯忘れることが出来ない。私は先生のドイツ文学の初めての弟子であった。

六高の校友会には「独逸語部」があつて、明治39年に創立された。初代部長は沢井要一であった。折りに触れてドイツ語の演説や講演、演劇などを催した。大正期になって活動は盛んになった。二代目の部長は池山栄吉が就任、教師のフェーラー、ベッケルらが協力し、しばしば出演した。だがその後学制変更があり、英語部との合併論も起きたりして低調となつて来、大正11年まで活動を停止するに至つた。「十二年二月、独逸語部は雪山俊夫教授の帰朝を迎えて三年ぶりに講演会を催した」。<sup>6)</sup> 大正13年には雪山の指導のもとにファウスト研究会を催した。これらについては後述する。

## 5. 『帝国文学』のマン兄弟論

雪山は『帝国文学』に明治42年(1909)11月号から大正7年(1918)9月号までドイツ文学の評論・翻訳を全部で10編寄稿している。その中で注目すべきはトーマス・マンをいち早く紹介していることだろう。即ち、明治43年12月号の「マン兄弟論」と同44年4月号の「マン兄弟の傑作梗概」である。このように兄のハインリッヒ・マンと共にトーマス・マンを論じているのが特徴だ。

「マン兄弟論」は、文学史家のアドルフ・バルテルスがマン兄弟の作品にユダヤ人的特徴が認め、デカンダンの作家として貶しており、最近トーマスは詩人でなく才能に富めるマッヘル Macher だと評し去っているが<sup>7)</sup>、自分はこの説には賛成できないとして筆を取つたものである。自分はマン兄弟及び彼等の小説には「輓近独逸文壇に於て稀に見るの詩人的性格と深刻なる詩作を認め得るやうに思ふ」。雪山は偶々読んだクルト・マルテンス<sup>8)</sup>のマン兄弟論を援用しながら両者の創作の態度、思想傾向などを比較している。そして結論としてこう述べている。

「今日までの所ではハインリッヒは性癖強く頭脳自由にして教養広く、トオマスは感情幽婉に深刻なる人間智を有して居る事を認むる事が出来る。」

ともあれ、これは日本におけるほとんど最初のトーマス・マン紹介であった。<sup>9)</sup>

「マン兄弟の傑作梗概」ではトーマス・マンの『ブッデンプロクス』(Die Buddenbrooks, 1901)、『トリスタン』(Tristan, 1903)、『墓所への道』(Der Weg zum Friedhof, 1900)、『殿下』(Königliche Hoheit, 1909)、ハインリッヒ・マンの『遊楽郷にて』(Im Schlaraffenland, 1900)、『女神たち』(Die Göttinnen, 1903)、『人種の間』(Zwischen den Rassen, 1907)の梗概と批評を述べている。例えば『トリスタン』について「此小説集は六篇より成つて、其出来

ばえは長篇ブッデンブロックスよりも立ち勝って居る。描写も立派で知見も一層深く内面生活の観照も一層明白となって居る。其熱あり光あり、真率悲哀にして慰藉に富める思想は炬火の如く相連なりて現代の破れたる文化の最後の謎語シエトゼルを窺ひ知らしめる。他の若き作家が嫉心なくトオマス・マンを彼等の芸術の師範と仰ぐほど高く清醇な詩作である」と評している。

## 6. 『層雲』とドイツ文学

『層雲』は明治44年(1911)4月に新傾向俳句の機関誌として、荻原井泉水の経営・編集で、河東碧梧桐、大須賀乙字らを同人として創刊された。井泉水は創刊号の「編集室より」に次のような抱負を述べている。

「層雲は俳壇を文壇に紹介し文壇を俳壇に紹介せんが為めに出でたるものに候、俳壇の諸兄に対しては素よりより広く俳句研究の機関たるべく候へども主として新機運に向つて猛進する作家の道場たらんことを期し申候文壇の諸兄に対しては広き意味に於て我等と同趣味なるもの、会堂たるべきは勿論に候へども主として独逸文学を唱道する者の舞台たらんこと期し申候」(下線は稿者)

これを読むと、井泉水は『層雲』を当初から新傾向俳句唱道のためだけの機関誌でなく、より広汎な文芸界と交流し得る文芸誌として発刊したこと、また、ドイツ文学の紹介ということもそうした精神に添うものとして取り上げられたということが分かる。井泉水がこのような理想主義的な考えを持ったのは、当時愛読していたゲーテやシラーの影響を受けたためでもあろうが、雪山俊夫(暁村)や小牧健夫<sup>10)</sup>(海潮音)、青山延敏<sup>11)</sup>(郊汀)などドイツ文学専攻の友人からの感化もあったであろう。

荻原井泉水は明治17年(1884)6月東京生まれ。一高を経て明治41年(1908)6月東京帝国大学文科言語学科を卒業、さらに大学院に進んだ。一高の寮では雪山俊夫と同宿、以来友人となった。一高時代に「一高俳句会」を興し句作に熱中、『ホトトギス』に投句、明治42年には時事新報の俳句欄を担当した。また一方、学生時代からドイツ語に力を入れ、明治39年から『日本及日本人』に「ゲエテの言葉」を連載した。これはゲーテに親しく師事したフォス、エッケルマン等の文章を翻訳したもので、後に明治43年7月『ゲーテ言行録』として上梓された。

井泉水の最初の著書が『ゲーテ言行録』であったことはまことに意義深い。井泉水の明哲な頭脳や強烈な個性と意志力などは生得なものであるが、俳句革新のための飽くなき探求心、真摯な努力、文学に於ける理想主義や生命主義、自然観などはゲーテの生き方や文学から学び取ったものであろう。俳誌『層雲』がドイツ文学の紹介を兼ねることになったのもひとえに井泉水の強い意向に基づくものであった。

創刊号の巻頭はヘルマン・バルの「自由」(海潮音訳)で飾られ、次いではトーマス・マンの「盡頭」(暁村訳)、ライナー・マリア・リルケ「老翁」(喬訳)、そしてグスタフ・ファルケ「死はさやけく快きもの」(青山郊汀訳)が置かれている。このように巻頭及びその周辺にドイツ文学関係の記事を掲げるのは、以後も大体踏襲されている。

雪山が訳したトーマス・マンの「盡頭」は、本文を見ると、これは「まちはずれ」と読むことが分かる。雪山は熱心な仏教信者であり、漢学の素養があったので、このような題名にしたのであろう。この作品は現在では「墓地への道」(*Der Weg zum Friedhof*)として知られ

ているマン初期の短編小説である。マンがこの小説を発表したのは1910年(明治43)1月であるから、これが『層雲』創刊号に訳載されたのは非常に早い紹介であったことになる。とにかくこの時期雪山は、『帝国文学』を見ても分かるように、トーマス・マンに特に関心を寄せていたようだ。2号以下大正6年までに雪山は次のような寄稿を行っている。いずれも暁村の号を用いている。

「輓近独逸小説壇の一瞥」(明治44・9、11、12)、「思ひ出」(小説、チム・クレーゲル、翻訳)(明治45・11)、「評論、人生と観照、ヘッベル、翻訳」(大正2・1、3～4)、「幻想」(評論、アルベルト・シュテッフェン、翻訳)(大正3・8)、「夜半の寢覚に」(評論、ヒルテイ、翻訳)(大正3・11)、「近代生活の為に」(評論、オットー・ブラーム、翻訳)(大正4・1)、「詩作と郷土」(詩・随筆、シュトルム、フレンセン他、翻訳)(大正4・5)、「白日の海」(評論、ニイチェ、翻訳)(大正5・10)、「片鱗」(詩、アルノ・ホルツ・デーメル他、翻訳)(大正6・12)。

これらは雪山だけの寄稿だが、小牧健夫や青山延敏ほかの人々の寄稿を含めるとドイツ文学関係の記事は相当量に上る。『層雲』がその初期にドイツ文学の紹介に果たした貢献はかなり大きい。<sup>12)</sup>『層雲』誌上のドイツ文学の紹介は大正六、七年頃から次第に少なくなるが、これは自由律俳句の確立や井泉水がそれまでの印象的象徴主義から宗教的心境主義に移っていたことと関係していよう。『帝国文学』『層雲』以外にも、大正3年1月創刊の東大系のドイツ語学習・研究雑誌『独逸語』(独逸語発行所)にも雪山はG・ハウプトマンやオットー・ブラームの作物を材料に対訳など数回語学記事を書いている。

なおこれより少し前に、ベルリン大学教授エーリヒ・シュミットの死(1913・4・30)を受けて、雪山は読売紙上にライプツィヒ大学のキョステル教授による追悼文の要約文を発表した。大正2年(1913)9月7日付同紙に載った「エーリッヒ・シュミット」(雪山暁村)がそれである。この追悼文を書いたことで、ドイツ留学中にシュミットに師事した経験のある恩師藤代禎輔から感謝されたという。<sup>13)</sup>

ここで単行のドイツ語学書を見てみよう。雪山は大正4年『独逸語階梯』(*Leitfaden der Deutschen Sprache*)を独逸語発行所より上梓した。同年10月号『独逸語』(独逸語発行所)の巻末には次のような広告が載っている。

今や我国に於ける独逸語の普及と其の進歩とは到底昔日の比でない。夫にも拘らず教材の研究は寔に幼稚なもので従来出版されてあるものも其の多く原書の焼き直しに過ぎない旧式なものばかりである。即ち我が日進月歩の独逸語界は已に已に新なる研究のてになった教材をしきりに要求してゐたのである。(後略)

また同誌の「編集だより」に次の記事がある。

「弊社発行の文学士雪山俊夫氏新著独逸語階梯 (*Leitfaden der Deutschen Sprache*)の好著たるは今更贅すまでもなき事ながら第八高教授櫻井天壇氏より態々[近来頻出する類書の中一等地を抽けるものと愚考致居候御苦心の程御察申上候。云々]の評語を寄せられ洵に欣快の情を禁ぜず候。」

そして本書の特色としては①文法用語は簡易明快なドイツ語を以て説明したこと。②従来

の10品詞分類法によらず変化篇と支配篇に大別したこと。③学習者の陥り易くまた迷い易い点を一々細かく指摘し、懇切丁寧であること、などを挙げている。

以上の他に南山堂書店の『図書日録』(1920年12月)を見ると、この時期雪山俊夫編として次の読本がある。

○ *Zum Verständnis des deutschen Volkstums*. 一冊 大正五年三月

○ *Leben und Bildung*. 一冊 大正六年九月

○ 近代独逸語読本 *Moderner Deutscher Lesestoff*. 二冊 大正九年九月

近代独逸語読本は雪山俊夫選著となっていて、本書の特色として、(一) 時代ノ要求ニ応ジ彼国大家ノ名著名作最近ノ教材新刊諸雑誌等ヲ通ジテ生活ニ緊切ナル百般ノ語彙ト清新ナル各種ノ文体トヲ遺憾ナク収メタル事 (二) 最モ自然的ナ言語習熟ノ過程ニ遵ヒ幼年期ヨリ青年期ニ至ル諸種ノ代表的読物ヲ努メテ網羅シタル事 (三) 言語トシテノ独逸語ヲ修得セシムルト共ニ一般教養ニ資シ高尚ナ趣味性ノ涵養ニ補セシムルコトヲ期シタル事。とある。さらに『独逸文学』(第一輯、大正15年)には次の広告も見られる。

六高教授 雪山俊夫編 Wackenroder und Tieck, *Herzensergießungen*  
定価1円20銭、紙装上製 170頁

「この修道僧の思ひ出は Romantik の芸術観を知る為の入門書であり古典であるが一年ばかり独逸語をやった何人も面白く読み得るる」、とあった。

因みに『学士会会員氏名録』(大正9年)によると雪山の住所は「岡山市内山下83ノ2」であった。

## 7. ドイツ留学時代

雪山は大正10年(1921)1年半にわたって文部省在外研究員としてドイツに留学し、最初ベルリン大学で1学期、次いでライプツィヒ大学に2学期学んだ。彼は帰国後「現代独逸思想界の諸相」<sup>14)</sup>と題する講演を行い、留学生活と第一次大戦後のドイツの思想界について具に語った。この講演は大正12年(1923)2月3日に六高の「独逸語部」主催のドイツ語演説会で行ったもので、のちに同年3月号の校友会雑誌(64号)に掲載された。この講演会はドイツ語で行うのが通例となっており他の4人はそれに従ったが、雪山は日本語で行った。「けれども雪山教授の御講演は邦語で行はれ且先生の該博なる御教養と御熱誠との流露として現代独逸文化のあゆる方面について興味多く語られたため、実に多くの聴衆を引き付けた。ここに改めて同先生に深く感謝する。」(「独逸語部々報」、同上号)とにかく一読してその内容豊富なことに驚かされる。雪山は講演の冒頭でこう述べている。

私は大正十年四月二十一日に伯林に着しまして、昨年十一月一日まで滞独致しました。滞独中は主として莱府と伯林とでドイツ語学及文学の研究に従事してまいりましたのであります。ハンブルグの総領事官邸で恩師フローレーンツ先生や三井の間崎技師<sup>15)</sup>(元私の学生であった)等と共に奉祝した天長節祝賀会を滞独最後の記念として、翌朝ドイツ船によって渡米いたしました。米国では東部中央部及キャリフォルニヤ州の五、六の大学でドイツ語、ドイツ文学の研究及学習状態を視察して、年末に帰校いたしました。



因みにベルリン大学では聴講生として1921年の夏学期に学び、シャルロッテンのベルリン街103番地に、ディートリヒ夫人の許に下宿していた。<sup>16)</sup>同年5月31日に入学手続きを行った。その後ライプツィヒ大学で2学期学んだ。同大学の文書館に受講資料が残されていないので聴講生だったようだ。

さて上記講演では次いで戦後のドイツの各方面での困難について語る。「要之、ドイツ国民は今日経済上の窮乏を体験してゐますが、更により深い国民的意識に於て、物質文明の破綻の為に精神上の動揺と公文とを痛感し、新しい精神生活にあこがれ、新しい文化建設の為に一種焦燥の感に囚へられてゐるのであります。」

雪山が最初に挙げたのが一般文化現象として今日ドイツでは偉人崇拜の風潮と自国の歴史を回顧する傾向が目につくということであった。その際注目されるのは偉人と言っても、ドイツ帝国主義や資本主義の躍進に与った人物というよりも精神文化の向上に業績を残した人に崇拜や評価が高まっているという。ルターやゲーテやカントに対する新しい崇拜や、クライストやヘルダーリンのような詩人が評価を高めている現象が見られるとしている。ドイツ各地の大小都市でこれらの偉人たちの記念祭が盛んに開かれている。例えばルターについては、昨年1月下旬に行われたヴィッテンベルクの記念祭には新教の宗教家が参集して、結束してルターの精神に基づく新宗教運動を起こそうと決議したし、アイゼナッハやワルトブルクの彼の遺跡も青年巡礼の目的になっていることを強く感じたという。また昨年6月ハレで開かれたカント大会では現代一流の哲学者や哲学詩人カイゼルリングの講演もあり、外国からの参加者も多く（在独日本の同学学者が7名もあり）甚だ愉快的な会合であった。ゲーテに関しては自分の体験も交え次のように述べ、関心の深さを示している。

次にゲーテに到っては其の崇拜は予想以上に盛んで一般的で深く民衆の間に浸潤してゐます。思想感情がより近いといふこともありませうが、恐らく英国に於ける沙翁の崇拜や研究とは比較にならない熱心さを以て、ドイツに於てゲーテは尊敬され研究されてゐるので、彼に関する最近刊行の伝記や著述は枚挙するに遑なき有様です。昨年六月一六七両日間のワイマールゲーテ総会には唯一の日本人として参会して見たのでありますが、司会者ビルクリンさんや辱知の評議員ワーレさんの報告によりますと、「国家多難の際にも拘らず会員増加し、遺産の寄贈あり、ドルンブルク城砦—ゲーテが千古の名作イフィゲニーを書いた—の新にゲーテ会に所属するあり同慶の至りに堪へぬ」といふ隆運を示してゐます。相次いで催されたヴェツラーのヴェルテル記念祭にも参会者は非常に多かつた模様に出ました。二月二十七日より三月五日までのゲーテの出生地フランクフルト・アム・マインの「ゲーテ週間」にも出席して見ましたが、これまた予想以上に盛んなものでありまして、大統領エーベルトさんハウプトマン、トーマス・マン、ウンルーなどの大家の追想演説や講演が会衆に非常の感銘を与へ、各劇場に於てゲーテを記念せむ為に上演された『エグモント』『タッソー』『イフィゲニー』等の戯曲と、記念展覧会に於けるゲーテの肉筆の詩や書簡や絵画その他当時のフランクフルトに於ける芸術の陳列は、世界の近世史に異彩を放つ彼の天才に対する敬仰の念をそそりました。

ワイマールにおけるゲーテ総会にただ一人の日本人として参加するなど、とにかく雪山の



ゲーテに対する関心は当時の日本人留学生に比べて異常なほど強かったことが分かる。こうした情熱が後年彼が日本ゲーテ協会の設立に尽力することに繋がったと考えられる。

次に雪山が語っているのはドイツにおける異国（外国）文化に対する驚異と憧憬である。特に東洋に関する研究が盛んになっているのは喜ばしい現象であると前置きしてから、日本についてこう述べている。

日本に関する書物は私の記憶する所では、在独中十数種出版されております。（中略）文化方向の研究では、美術方面には『日本の浮世絵』『浮世絵の歴史』『日本の版画』『日本の建築』といったやうなものが出版され、萊府のインゼル出版会社のキーベンベルク教授は岡倉由三さんの『御茶』を推賞し、もう数版を重ねたと言っておりました。日本の塔の研究で学位を得た伯林のトラウトさんは、近く東洋学会で日本文化の為に気を揚げると意気込んでおりました。文学ではハンブルク大学のフローレンツ博士の『日本文学史』はなんともいっても権威をなしております。言葉の方では伯林大学附属の東洋語学校に元本校で教鞭を執ってをられてゐたシャルシュミットさんがおられます。宗教では萊府大学の神学科教授としてハースさんがおられます。（中略）日本に関する著述で近来尤も多く読まれてゐるのは、知名の文学者ケラーマンの『日本の散策』と、ラフカデオ・ヘルン先生の数巻の書であります。ヘルン先生の紹介は御存じの通りロマンチックの色彩が濃厚に現れておられますので、彼の地の日本理解者の多くは未だロマンチックの日本しか知っておられません。彼地に於ける日本に就いて最後に想起されるのは、ドイツに於けるドイツ文学研究の権威たる萊府大学のキョステルさんの御宅へ訣別の為に伺った折に、私の御用達申した日本文学に関する部分を、先生がドレスデンでやられる筈の講演の原稿の中から指摘し乍ら申された御言葉であります。先生は「今日では東洋の研究は最早好奇心の対象ではなく、内的欲求から出てゐる。十数年来の期待は斯うして漸く充たされるの機運に到着した。実は余は希臘文化に対すると同様の尊敬を、東洋の文化に対して抱持してゐる。戦前には是非日本へ一度行って見たいと思つてゐたけれども、今日では断念せざるを得なくなった云々」と言つて居られました。

雪山はドイツ語及び語学教授法を留学目的にしていたが、それに留まらず関心はこのように広がった。特にドイツにおける日本に対する関心ないし研究如何ということを見ていたのだ。その好奇心には驚かされる。日本ほど詳しくはないが中国とインドについても同様に言及している。次いでドイツで今最も読まれている本として、カイゼルリングの『哲学者の日記』とシュペングラーの『西欧の没落』（上下二巻）を挙げ、特に後者には自国文化の凝視が見られるとして大きな反響を呼び起こしているという。

極めて簡単に内容を述べてみますと、彼の提説の結論は西欧の文化は既に究極に達し、更に発展するの能力なしといふのであります。彼は此の結論へ帰納するため、文化の生命論を掲げておられます。すなはち、個人の生涯に青年期壮年期老年期がある如く、文化にも青年壮年老年期がある。そうして文化の壮年期に於ては、其の時代の人類の精神生活と文化とは遺憾なく相協調し相順応するが、老年期になると文化の感情内容が飛散して希薄

となる為に、当該文化の中に於て体験される個人の精神的生命と文化の形式とが、相渾融し相和協することが出来なくなるといふのであります。次に antike kultur, aegyptische kultur, magysche kultur, faustische kultur の四個の文化について其の消長を論じ、faustische kultur 即ち西欧の文化は、其の成熟期に於て有つてゐた神及世界といふやうな情意価値は今や認識的代用品として力及物質と変化して了ひ、情意の潤ひを消失して物質化し器械化し骨化した概念のみを残すやうになった。そうして澁刺たる刺激性と根強い確信力とを喪失して了つた、残骸のやうなこの西欧文化は終極して、清新なる文化が興起し生長するの機運がまさに到来しつゝ、あると論じてゐるのであります。

『西欧の没落』の内容を要約するのは容易ではないと思われるが、雪山はこのように高校生たちも理解できるよう簡潔に紹介しているのは、彼の卓越した語学力と透徹した理解力と示している。同様なことは当時出現しつつあつた表現主義の説明についても言える。

私の見る所では表現主義は文芸上の写実、新古典派、浪漫派、象徴主義、印象主義の様な流派や傾向ではなく、体験と行為の方式或は世界観であります。故に文芸乃至芸術上の流派や主義よりは更に高い更に意義ある範疇に属するので、言はゞ十九世紀の物質的文化と種類を異にした、新しい文化建設の為めの生命感であります。(中略) 芸術上の流派として考へると、表現主義に於ては、芸術家の精神的動揺が体験去れたまま、直接作として持続されます。若し芸術家が画伯であるとすれば、其の持つてゐる画笔がカンパスの上に画伯の内的動揺或は感激と其の儘連続するので、カンパスの上には作者の内的生命の沈殿が直接現はれてゐます。故に伝習や技巧とは没交渉です。従つて鑑賞者の共作—共働—創造への沈潜を要求します。従つて難解だといふ批難を招きます。

中世ドイツ文学研究については後年『ニーベルンゲンの歌 基礎の研究』(昭和9年)の「緒言」においてこう述べている。

独逸文学史上十三世紀の文学は、第一隆昌期を象徴するものとして、我国の平安朝文学が近松を中心とする江戸時代の文学に対するやうに、ゲーテを中心とする黄金時代の近代文学と相呼応するのみでなく、語学史の研究者に取つても甚だ重要な分野を提供するが故であらうかと考へるのであつた。斯うして中世の文学語学に関しては、伯林で故レーテ G. Roethe 教授の研究室に出入し、ヘルマン M. Hermann 教授の中世文学の演習にも加はつた、萊府へ移転して専ら故ジーフェルス Ed. Sievers<sup>17)</sup> 教授の指導の下に、畏友ドクトル・カルク Fr. Karg<sup>18)</sup> 氏と中世語学の研鑽を共にし、傍ら故シュトライトベルク .Streitberg<sup>19)</sup> 教授の印度欧羅巴文献学の研究室にも参じた。

特にジーフェルスには世話になつたやうで「独逸の中世語の研鑽に関して、高齢と多用とに拘らず、欣んで指導の勞を執られた故ジーフェルス先生」と書いている。最後に雪山は次のように述べてこの講演を終わっている。

「新しい精神文化!、私にはドイツを頭に入れずにそれを考へることが出来ません。経済

生活の困窮のために当分の間は学問に於ても、財力を要する方面には業績の挙がらないでせうが、新しい精神的文化の建設には、ドイツは必ず大に貢献することを認めねばなりませんまい」。雪山のこの講演について六高の学友会雑誌64号（大正12年3月）の「独逸語部々報」は、「実に多くの聴衆を引き付けた」と讃えたことは上述したが、さらに付記して「雪山先生は独逸に一年半の短い留学中、国内の諸名士、文豪と親しく交際せられ、友誼を結ばれ、日本人留学生中異彩を放ってをられました。」と述べている。翌大正13年にも雪山は独逸語部会で「ゲーテとスピノザ」「ゲーテとシルレル」ゲーテの自然観」と題して講演し、その他カントの生誕二百年を記念して「カントとゲーテ」を講演し六高生たちを文学的に啓発するところが大きかったようだ。<sup>20)</sup> 専門の中世語学文学に関しては帰国後、大正13年9・10月号『講座』（大村書店）に「古高ドイツ文学から中高ドイツ文学へ」を寄稿した。同時に大村版ゲーテ全集の『詩と真実』の翻訳に着手、上下巻が大正14年・15年に出た。本邦初訳で、注目すべき訳業であった。

ここで留学時代のエピソードを紹介したい。それは東大独文科教授の青木昌吉の死を受けて語った「追憶」<sup>21)</sup>の一節である。

次に大分昔話になるが、青木先生の在外エピソードを一つ追想して、先生の間味の一面を点描して見る。一九二二年の秋だったと記憶する。井上〔哲次郎〕、青木両先生が某日萊府へ行かれるとの通信があったので、一年余りも既に萊府に在った私は早速ホテルを訪ねると、井上先生には旧友フォルケルト教授の私宅へ行かれた直後で、青木先生はお一人であった。「アウエルバッハスケラー…へは？」と訊くと、昨晚行ったとのことで、萊府第二の文学的名所シラーホイスヘンへ御案内することになった。ホテルを出て二十メートルばかり話し乍らブムメルンしたあと、アウトを捉へようと思つて小走りに一步先きへ行く。世界戦争末に自動車はフランスへ奪はれたと噂され、当時は伯林でも自動車は払底で、萊府あたりではドロシュケの十九世紀振りが猶往々見受けられた。近所にはアウトもドロシュケも見当らない。電車と諦めて振り返ると青木先生の姿が見えない。何か忘れられたのではあるまいかと、ホテルまで引返したが居られない。再び元の街路を辿ると街角に立って居られるのが見える。急いで近寄ると先生はポケットからウイスキーの小瓶やうのものを露出させ、それを指差し乍ら会心の微笑を洩して居られる。お酒を売る店へ入ってリキョールを買って居られたのであった。丁度アウトの流しが来たので早速キャッチして二人は車上の人となり、物の二十分とたたぬ内に、ゴーリスのシラーホイスヒェンへ着いた。詩人シラーの窮乏時代を偲ばせる陋小なシラー名所を隈なく見物して辞去する際に、顔昵みの案内の小母さんに、「フリードリッヒ・シラーはリキョールを飲みましたか」と訊くと、彼女は真面目に「存じません、何ですって、我等のシルレルが……」と怪訝な顔をした。青木先生は、「シラーは飲まないよ」と言つて居られた。此の夕、チューリングル・ホーフで井上先生と三人でエトランゼーらしく打寛いでビーヤを傾けるのであったが、あの萊府街頭に於ける青木先生の会心の微笑こそ、私には忘れ難い印象で、先生の間味を最も朗かに物語るものである。

これは雪山が留学時代に体験した青木昌吉の思い出を語った挿話に過ぎないが、筆者は読



んで懐かしさ覚えた。1989年夏の3ヶ月筆者は国際交流基金により明治期にライプツィヒ大学で学んだ日本人留学生の資料を大学文書館に於いて調査したが、その際アウエルバッハスケラー、シラーの家、チューリング・ホーフを訪れたことがあるからである。同時に、青木、雪山というゲルマニスツイクの大先達が既に70年近くも前に訪れている事実に感慨を覚えるからだ。さらに井上哲次郎に至っては明治10年代にアウエルバッハスケラーで鵑外とゲーテのファウストの翻訳について語り合っているのである。

## 8. 京都への移住

留学から帰国後雪山は東大か京大で中高ドイツ語・文学を講義することを願ったようだ。舟木重信は前述の「雪山先生を想ふ」の中で次のように述べている。

「先生は帰朝後東大に移って中高ドイツ語及びその文学の講義をなさるはずだったが、主任の上田先生が急に他界されたので、そのことは実現されなかったさうである。」

東大独文科の主任上田整次教授が大正13年(1924)4月12日に物故したので、それを断念したようだ。それで京都の高校でドイツ語教師をしながら京大で講義する道を選んだようだ。そのため当時京大教授の西田幾多郎(哲学)や藤代禎輔(ドイツ文学)に対して、京都の三高教授の片山正雄が新設の九州帝国大学の独文科教授に就任するのでその後任として三高へ移れるように依頼している。西田は手紙の中でこう書いている。

「雪山氏は人物は小牧君の方が上かも知れぬが学問は決して之に劣らず高等学校の教師としては優秀なる学者と思ひます。特に同氏は研究心に富み中世独逸文学につき学位論文を書いて居るのではないかと思ひます。東京、京都なら希望でせう」(山本良吉宛 大正13年7月23日)

「例の雪山が参り『今度片山が九大の方へ行くゆえその後へ世話してくれ。藤代は京大の方にも関係をつけるからと云ふから』と云って参りました。小生は森君に話しては見るが君は武蔵高校の方はどうしたのか。小生と山本君とは年来の親友ゆえその承諾を得なくては困ると云った所、山本さんの方はきっと承諾を得ますと云って居りました。小生が始に御話した様に雪山がこちらへ来ると云へば致方ないとしても小牧も東北へ行く由貴兄もさぞ御困りの事と思ふ。私は雪山といふ人は多少利害の念によって動く人と思ふが大学の所在地にて研究するといへば已むを得ざるべきか(山本良吉宛 大正14年3月16日)。山本良吉は当時武蔵高校教授だったので、同校への転任の話もあったことが分かるが、最終的には京都大学文学部講師、第三高等学校講師、それに龍谷大学講師兼任ということになった。

かくして京都大学文学部講師としてドイツ中世文学を講義するようになった。『京都大学七十年史』には「なお藤代の協力者のうちで注目すべきは、大正一五(一九二六)年より始められた講師雪山俊夫によるドイツ中世文学の講読である。これは講師ハンス・ユーパーシャルのドイツ音声学の講義とともに、日本におけるドイツ文学研究に新分野を開いたものと言ってよい。」とある。そして早くも昭和3年7月には、山岸光宣監修の高等ドイツ語講座6には「中世文学講話」を寄稿した。これは彼が当時主に取り組んでいた『ニーベルンゲンの歌』と対比されることの多い叙事詩『クートルーン』(Kudrun)について平易に解説した小論であった。京大での教え子の一人岡崎初雄<sup>22)</sup>は「恩師雪山先生の思い出」<sup>23)</sup>の中で学生時代の一こまを次のように回想している。「われわれの同級生は、といつても集ま

るものは五、六人だったが、月に一回は加茂川べりの料亭で先生を囲んでコンパを催し雑談したのは楽しい思出である。同志社の辻本、関西大学の福本、京都学芸大の原教授たちは必ず出席していた」。時には京大の独文科生とこうしたコンパもあったであろうが、多くは京大、三高、龍谷大での講義と、ゲーテ協会の設立準備に忙しく、それ以外は学位論文の執筆に従事したのではあるまいか。

## 9. 日本ゲーテ協会の設立と『ゲーテ年鑑』の創刊

雪山俊夫の功績の一つに日本ゲーテ協会の設立に指導的役割を果たしたことが挙げられる。岡崎初雄も前記の回想文に「私たちの二年の時、日本ゲーテ協会がはじめて創立され、都ホテルで盛大な第一回の学会があった。それは全く雪山先生の強力な推進によって成ったもので当時の先生のゲルマニストとしての



日本ゲーテ協会発表会式（昭和6年5月16日、京都市都ホテル4階）  
ゲーテ年鑑第一巻より

エネルギーな弟は今も尚眼前にほうふつとして浮ぶ。」と書いている。『ゲーテ年鑑』第一巻の「彙報」によって発会式の様子を見てみよう。昭和6年（1931）5月16日午後3時より京都市蹴上4階の都ホテルの4階のホールで日本ゲーテ協会の発会式が挙行された。本会の会長青木昌吉博士（東大文学部独文科教授）は、都合のため生憎欠席したので顧問の新村出博士の司会によって進行した。成瀬清による開会の挨拶に続き雪山は日本ゲーテ協会の設立について報告した。その後ハンス・ユーパーシャルのゲーテ精神の日本的解釈の講演、及びマイエンブルクの講演があった。次いで青木昌吉、友枝高彦（日独文化協会主事）、片山正雄（九大独文科教授）その他からの祝電が披露された。ワイマールのゲーテ協会からも寄せられた。

Herzliches Willkommen im Reiche goethischen Geistes und goethischer Forschung der jungen Japanischen Goethegesellschaft fruchtbare Arbeit zu völkerverbindender Gemeinschaft in goethischem Sinne erhofft.

Goethegesellschaft Weimar.

ただしこのワイマールのゲーテ協会の祝電はプログラムに記されていないので、当日に読まれたのではなく後日届いたのではあるまいか。祝電の次はゲーテの『タッソー』の対話が二人のドイツ人によって朗読され、それが終わると柳兼子によってトーマの「ミニヨン」と

シューベルトの「野ばら」「旅人の夜の歌」が歌われた。その後京都大学オーケストラによりベートーベンの「エグモント」序曲が奏された。さらにエルヴィン・マイエンブルク（新潟高教師）によるゲーテの詩「歓迎と別れ」「プロメテウス」の朗読があり、最後に七高教師エルンスト・プッチェルによるピアノの即興演奏があった。

『ゲーテ年鑑』第一巻（昭和7年5月）は百年祭記念として日本ゲーテ協会（代表者・雪山俊夫）の編集によって南江堂より発行された。所収論考は、日本文として巻頭の青木昌吉の「ゲーテ」の小説『ヴィルヘルム・マイステルの修業時代』以下、藤浪鑑、石倉小三郎、片山正雄、木村謹治、西田幾多郎、奥津彦重、佐久間政一、佐藤通次、吹田順助、山岸光宣、雪山俊夫ほかによる全19篇、独文にはエルヴィーン・ヤーンの「ハイネのゲーテ観」のほか、エルヴィン・マイエンブルク、ミウ

ラ・アンナ、ヨハネス・ミュラーが寄稿している。雪山の論文は「ゲーテとカントの接触」と題するもので、カント哲学がゲーテに及ぼした影響を実証的且つ丹念に調べ上げた長篇の力作であった。雪山はゲーテについてもすぐれた研究家であった。杉山産七の「日本に於けるゲーテ文献要覧（一）」と、「会員名簿」は貴重である。「編輯後記」は雪山が書いた。その中で次のように述べているのが印象的だ。

「斯くして集まった諸家会心の論稿二十有数篇予定通りに四百頁に余る大冊を見るに及んだのは、一は執筆諸家の犠牲的精神の賚賜であると共に、一は万象を絶し万象を包括するゲーテの天才の感孚に由るやうに感ぜられる。執筆諸家に対しては素醇なる感謝の意を表すると共に、ゲーテの偉大を讃えたいと思ふのである。」雪山は第三巻（昭和9年）には「ゲーテと絵画」を寄稿した。雪山はこの後日本ゲーテ協会の副会長を長く務めた。会長は京大教授成瀬清。年鑑は昭和17年度の第11巻まで続刊されたが、そのために雪山が尽力したことは言うまでもない。

## 10. 『ニーベルンゲンの歌 基礎の研究』 上梓

昭和9年3月大岡山書店から『ニーベルンゲンの歌 基礎の研究』出版された。雪山の主

# 鑑年テーク

念記祭年百

年二十三百九千 卷一第



會協テーク本日

年七和昭

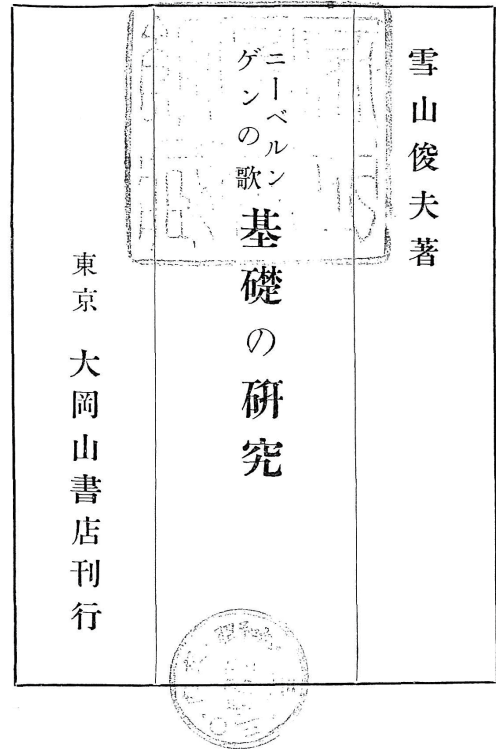
ゲーテ年鑑第一巻（昭和7、1932）



著である。全 615 頁。出版した本屋は舟木重信の友人であった。

雪山が中世ドイツ文学語学を本格的に学び始めたのはドイツ留学時代であったことは既に述べた。だが彼が中世文学を学ぶに至った経緯・動機及びその重要性について「緒言」の冒頭で次のように述べている。

本書は、『ニーベルンゲンの歌』 das Niebelungenlied の基礎に就いての、文献学的、総合的、批判的小考察の集成である。ゲッセン Göschen 叢書の『ニーベルンゲンの歌』を、巻頭の文法撮要と巻尾の語彙註解とを葉に読み始めたのは、大正も初年の頃であった。学窓を出て数年にわたる近代独逸語の語学的な携はりと、新古典派の台頭頃までの推移する現代文学への関心から、独逸文学と独逸語学との歴史的研究に眼醒めたことと、当時独逸文学の学徒の間に好んで読まれたバアテルス A. Bartels の独逸文学史が、独逸の本質を最も完全に且つ明白に具現した文学的製作として、又た独逸民族が地上に其形姿を消失することがあっても、独逸民族の名を最も輝かしく想ひ起させる代表的製作として、ゲーテの『ファウスト』と『ニーベルンゲンの歌』とを推奨してゐるのを見たことが、機縁と刺激を与へたやうに回想される。爾来、中世の独逸文学と語学との関心は維持されてゐた。大正三年に独逸へ行かうとして欧州戦乱の勃発の為に妨げられ、十年の春改めて独逸へ留学することになり、彼地に渡って日本の独逸文学語学の一小学究として最も深い印象を受けたのは、独逸では文献学的基礎的の討究が文学史上の各時代に亘って盛んに行はれてゐることと、中世の文学や語学が予想以上に尊重され、独逸文献学の主要な分科として熱心に討究されてゐることであった。



学位論文となった  
『ニーベルンゲンの歌 基礎の研究』

つまり、大正初年に注釈書を頼りに『ニーベルンゲンの歌』を読み始めたが、その後近代ドイツ語に携わったのと、現代文学と語学との歴史的研究に目覚めた。その頃読んだバルテルスのドイツ文学史にドイツ民族の代表作はゲーテのファウストと『ニーベルンゲンの歌』であると書かれているのを知ったのが機縁となり、大きな刺激を受けた。ドイツに留学して最も深い印象を受けたのは、文献学的・基礎的研究が盛んであり、中世の文学や語学が予想以上に尊重されていたことだったというのである。

そしてベルリン大学ではレーテ (G. Roethe) 教授の研究室に出入りし、ライプツィヒ大学ではジーフェルス (Ed. Sievers) 教授の指導を受け、畏友カルク (Fr. Karg) 氏と中世語学の研鑽を共にしたことなどについては既述した。

帰朝後雪山は大正 14 年 10 月から講師として京大文学部で独語独文学に携はることになり、

翌年から更に中世の文学語学にいそしむことになった。その間の講義の覚書<sup>ノート</sup>を整理して、『ニーベルンゲンの歌』を中心にドイツ中世文学一般を扱うと当初稿を起したのであったが、先づ基礎の研究だけを纏めて公けにすることにしたのである。本文の批判は既に昭和四年の春完了したが、環境が中世研究に専念することを許さなかったのと、関連する諸原典の研究に多くの時間を要したのと、文献を取揃へることが困難であったのと、自分の怠慢とから、なかなか全部の完了とならず忸怩たる思いだった。唯だ僥倖とでも言おうか、そのために本年八月までにドイツで出版された関係文献に触れることが出来るようになったという。このような多年の辛苦研鑽の賜物が本書である。

雪山はまず『ニーベルンゲンの歌』がなぜ lied と呼ばれているかに疑問を抱き、先行の研究者の説を丹念に検討する。そして中世ドイツでは、歌謡<sup>リート</sup>の概念が明確でなく、広い意味を持っていたことを立証し、結論としてこの作品は叙事詩であることを明らかにした。こうして大家ラッハマンその他の歌謡説を退け、さらに口承の民衆叙事詩と英雄叙事詩の概念を明確に区別し、『ニーベルンゲンの歌』は民衆叙事詩ではなく、天分豊かな芸術的個性によって形成された芸術作品であることを詳しく説明している。

写本 ABCD 等の優位性の問題においても、諸説を丹念に比較し、学界で定説だからといった理由でなく自身が納得行くまで徹底的に調べる。そしてそれを読者が納得するように丁寧に説明する。このあたり著者の学風が現れている。付録の「伝説の童話起源説について」は、心理学者ヴントやパンツェル (Fr. Panzer) に代表される、英雄伝説は童話に起源するとの説の根拠の薄弱なことを指摘したもので、有益であった。今回、本稿執筆のために本書 (熊本大学蔵) を手にとって読んだが、その詳細で且つ大部な研究書であることに驚くとともに感銘を覚えた。それだけにその内容全体を理解し紹介することは容易ではない。だが現在でも『ニーベルンゲンの歌』の専門家にとって不可欠な研究文献であることは確かであろう。雪山はこの研究書によって昭和10月7月8日、京都大学より文学博士の学位を授与された。またドイツ政府から日本人最初のフンボルト賞を贈られた。このことによっても本書の研究書としての価値が高いことが示された。なお雪山訳『ニーベルンゲンの歌』が上下二巻で岩波文庫に収められて出版されたのは昭和14～17年であった。これは原典の古風な趣を伝えていた。この外昭和10年代の仕事には吉江喬松責任編集『世界文芸大辞典』全七巻 (中央公論社) のドイツ文学関係の多くの項目を担当していることや、日独文化協会の機関誌『日独文化』第四巻二・三合併号「特輯・中世ドイツ研究」(昭和18年12月) に発表した論文「中世隆昌期とその背後」などがある。だが紙幅の都合で内容に立ち入ることは出来ない。この頃雪山は日本の最も優れたドイツ文学者の一人で特に中世ドイツ文学の第一人者と目されていた。

## 11. 帰郷後、問もなく物故

昭和18年(1943)雪山は京都の職を引き、帰郷し浦山善功寺に戻った。だがその後も研究のため京都へしばしば出かけたようである。やがて終戦となりこれからという時に、昭和21年11月8日浦山善巧寺にて胃ガンのため死去した。66才であった。同月15日の朝日新聞に次のような死亡広告が掲載された。

雪山俊夫氏（文博，前東大講師）富山県下新川郡東山村の生家善巧寺で八日死去。葬儀は十四日同寺で執行、中世ドイツ文学の研究家として日本で唯一のフンボルト賞を受けた。

京大講師を東大講師と誤記しているが、これは日本は当時第二次大戦末期から敗戦の混乱期にあって新聞発行の体制もまだ十分整っていなかったことから起きたミスであった。死亡記事の載った新聞は僅か二ページであったことにもそれが表れていた。京大時代の教え子である岡崎初雄は「恩師雪山先生の思い出」の中で語っている。「終戦後昭和二十一年の初秋、私は長岡工業専門学校から富山高等学校に転任し浦山の御宅をお訪ねした。その時は御元氣な御様子で間もなく御逝去になるとは夢にも思わなかった。日本ゲーテ協会はようやく今年の夏に復活最初の催しがあった。すべては戦争の故だと思う。あの戦争以来の生活の混乱と急迫には何人も例外たりえなかった。私も妻を亡くした。それは矢張り過勞からであり、それだけ身体的に犠牲をこうむる」と。

彼の死は病気が主因とはいえ岡崎が述べているように戦争の影響もあったであろう。いずれにせよ、終戦を期に再び研究生活に戻ろうと思っていたようだが、その願いが死によって断たれたのは惜まれる。

## 12. 終わりに

雪山逝去の報を知って当時九大名誉教授であった小牧健夫は急遽「雪山君の業績」<sup>24)</sup>を草して追悼した。

昨年十月、雪山俊夫君に富山へ帰る数日前に逢ったときはなかなかの元氣で将来の計画などを語り、来春からは京都に定住してゲーテ協会のためにも大いに力をつくしたいとも言っていた。ところが、富山へ往ってからもまもなく発病し、周囲の方々の手厚い看護もかひなく、つひに不歸の人となったのは痛惜のきはみであった。富山と京都との二重生活は何といっても色々な点で不便が少なくなかったであらう。それがこれから京都に落ついてゆっくりと仕事に専念しようとするときに、かういふことになったのだから残念である。

これによると小牧が最後に雪山に逢ったときはとても元氣で、将来の研究計画などについて語り、京都に定住して研究専念したいとも語っていたことが分かる。それだけに彼の急逝は驚きであり非常に残念であった。小牧は語を継いで雪山の学風についてこう述べる。

学者としての君の生涯はあくまで真摯に自分の専門の研究を一步一步深めてゆくことに終始した。それでも君は、深く君を識らぬ者が或は考へてゐたやうに、狭く専門の学に閉ぢこもってゐたのでなく、趣味も博く、関心も多方面に亘ってゐた。(中略)しかし学問にかけては極めて良心的であった君は軽々に所見を開陳することを好まなかつたから、至って地味な一学究の印象を与ゐたやうである。

筆者も小牧の見方に全く賛成である。雪山には派手さや器用さはなかったが、稀にみる熱心さ、着実さがあった。且つ留学から帰国後に行った講演を見ても分かるようには、視野と



関心の広さがあった。彼は日本で最初に京都大学で中高ドイツ語文学を講義し、ニーベルンゲンの歌の研究で学位を得たが、研究対象は中世文学に限らず、広くドイツ文学一般にも及んでいた。ゲーテ協会の設立に情熱を傾けたのもその現れだ。日本ではドイツ文学者は生前すぐれた業績を残しても死後急速に忘れ去られる傾向が強い。残念なことである。雪山俊夫の人と業績はもっと知られてよいと思う。将来もし、「雪山俊夫ドイツ文学論集」が纏められたら学界に裨益するところ大であろう。冒頭に記したように彼の貴重な蔵書が雪山文庫として残され、それが日本のドイツ文学、特に中世ドイツ文学研究に役立つことになったのは幸運であった。

### 注.

- (1) 『雪山文庫目録』は「神戸大学文学部新収図書目録」第8号として1967年4月発行された。内容は凡例・「雪山文庫について」(加藤一郎)に続き書名目録(全229頁)・索引(全43頁)から成る。
- (2) 最近この時期に発表した論文を纏めて『中世ドイツ文学論集』(私家版、平成30年)として出版した。これには終活の意味もあった。
- (3) 明治44年10月号『帝国文学』の「消息」欄による。
- (4) 舟木重信(1893-1975)ドイツ文学者、小説家。広島県生まれ。旧六高を経て大正7年東大独文科卒。長く早大教授を務めた。ゲーテやハイネを専門とした。
- (5) 『雪山俊夫を偲びて—七周忌法要記念』(善巧寺、1952年)。
- (6) 『第六高等学校 校友会部史』(2000年)103頁。
- (7) Adolf Bartels: *Geschichte der deutschen Literatur* (2 Bde. 1901/02.) 中においてであろう
- (8) マルテンス (Martens, Kurt 1870-1945) ドイツの作家。ライプツィヒの文学協会の会長。トーマス・マンの友人。連合国軍によるドレスデン空爆後に自殺。
- (9) 杉山二十一「マン年表及び日本の文献」(『カスタニエン』8、1934年10月)。
- (10) 小牧健夫(海潮音)(1882-1960)一高を経て明治40年東大独文科卒。京都、東京、水戸の各地で教鞭を執り、大正10年にドイツ留学。帰国後、九大教授。ノヴァーリスやヘルダーリンの研究家として知られた。早くから詩を『文庫』に投稿。暮潮という雅号で詩やドイツ詩の翻訳を『芸苑』『帝国文学』『詩人』等に発表。基調は温雅な抒情にあり、いわゆる文庫調。『層雲』に発表した訳詩も彼の詩と同様、温雅な詩語と訳述に特色があった。海潮音という号は上田敏の訳詩集から採ったものであろう。
- (11) 青山延敏(郊汀)(1888-1974)五高の独文科卒業後、東大独文科に学び大正2年卒業。ドイツ留学後、北大、広島大、専修大に勤務。松栄子の名で『層雲』にアナトー・フランスなどを訳している松田松栄は実姉であり、また社会主義者の山川菊枝は実妹。編著『日独詩盟』(南山堂、1943)がある。
- (12) 詳しくは拙稿「初期『層雲』とドイツ文学」(『熊本大学教養部紀要 外国語・外国文学編』第15号、1980年2月)を参照されたい。
- (13) 雪山俊夫「開拓者としての先生」(『芸文』藤代禎輔追悼号、1927年5月)

- (14) 六高『校友会雑誌』第64号(1923年3月)に掲載。この雪山の講演は同年2月3日の同校の独逸語部演説会で行われた(同誌の「独逸語部々報」による)。
- (15) 『会員名簿』(第四高等学校同窓会、1936)によれば、間崎千之(明44、二部工科)を指すと思われる。
- (16) Rudolf Hartmann: *Japanische Studenten an der Berliner Universität 1920-1945*, Mori-Ogai-Gedenkstätte der Humbolt-Universität Berlin, 2003. S.172.
- (17) ジーフェルス (Sievers, Ed.1860-1932) ドイツの言語学者、音声学。イエーナ、チュービンゲン、ハレ各大学教授を経て、1891年12月以後ライプツィヒ大学教授。
- (18) ドクトル・カルク (Dr. Karg) Germanistik 専攻生と思われるが詳細は不明。ドイツ伝記事典 (*Deutsche Biographische Enzyklopädie*), Konrad Krause: *Alma mater Lipsiensis-Geschichte der Universität Leipzig von 1409 bis zur Gegenwart* (2003) には登載されていない。なお雪山は後年、『ニーベルンゲンの歌 基礎の研究』の「緒言」で「畏友カルク教授」と呼び、謝意を表している。
- (19) シュトライトベルク (Streitberg, Wilh.1864-1925) ドイツの言語学者、ゲルマン語学者。ライプツィヒ、ミュンスター、ミュンヘン各大学教授を経て、1920年再びライプツィヒ大学の正教授に就任。
- (20) 六高『校友会雑誌』第67号(1924年3月)の「独逸語部報」。
- (21) 『ゲーテ年鑑』第8巻(昭和14年)。
- (22) 岡崎初雄(1907-1977) ドイツ文学者。旧制富山高等学校を経て、京大独文科に学び、成瀬清(無極)、雪山俊夫の薫陶を受けた。文部省専門専門学務局に勤務後、戦後長く富山大学教授を務めた。ゲーテを専門とし、また富山の演劇界に貢献した。
- (23) 『雪山俊夫を偲びて—七周忌法要記念』(善行寺、昭和27年)。
- (24) 日本独文学会編『ドイツ文学』第1巻(1947) 105-106頁。